

会 長 あ い さ つ

在外教育施設のよさを生かしたい

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会

会長 小出 治夫

会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。平素は海外子女教育の活動にご協力いただき心より感謝申し上げます。特に、役員の方には学校の職務の傍らさまざまな活動に参加いただき重ねて御礼申し上げます。

さて、本会は262名を数えるほどの会員数になり、在外教育施設派遣教員を経験した先生方が県内各地で活躍しています。自分の学校や隣の学校に在外を経験した先生方が増えたことは、大変心強い限りです。また、ここ数年茨城県から派遣される先生方の数も増え、今後、本研究会や先生方の活動が大いに期待されているところです。そういう状況の中、県内の5ブロックのいくつかの地区ではすでに支部を立ち上げ、地道な活動を行っているところも出てきております。私が所属する県東地区においても、遅ればせながら9月下旬に県東ブロック地区の研修会をもつことができました。今後横のつながりをもちながら活動を発展させていきたいと考えております。

しかし、いったん帰国してしまうと、海外の経験を生かそうと思ってもなかなか難しい点があるのも現状です。せっかくの貴重な経験をしているにもかかわらず、国内の学校で生かさない手はありません。そのためにも本会の活動に参加していただき、貴重な教育実践を生かしてほしいと願っています。

今、国内ではいじめ問題をはじめ、学力の問題や生徒指導上の問題などが起こっていますが、在外教育施設のよさをもっと生かしたいものです。教育課程の組み方、学校運営委員会の活用、授業に専念できる体制、欠課時数を心配することなく日本の文化伝統を生かした学校行事がよく行われていることなど、日本人学校での教育実践をもっと取り入れられないものかと思っています。それらを実際に経験してきた派遣教員の先生方は、国内の問題解決のためにも各学校で生かしていくことを期待しています。

本研究会は、夏季研修会を始め、各支部での研修会などで、皆様と力を合わせ微力ではありますがお手伝いさせていただきたいと考えています。本会の活動に対する皆様からの提言をお願いすると同時に、今後のご活躍をお祈り申し上げあいさついたします。

今年帰国された先生方からのお願い

現地校との交流を通して

ジャカルタ日本人学校勤務 山田 聡

(2003. 4～2006. 3)

昨年の夏休み、普段から日本人学校と交流のある現地校（アン・ニサー校）で念願だっ

た歌唱の授業を行わせてもらった（対象は中学2年生）。この学校では、10月初旬に行われる日本人学校恒例の文化祭（JJSフェスティバル）で毎年様々な内容のものを発表してくれている。そこで音楽の教員である私は、以前から現地校での授業を希望していたこともあり、それが実現した。指導した曲は KIRORO の「未来へ」。この曲になった理由は、インドネシアでは少し前の日本の曲が流行っており、何となく耳にしたことがある生徒もいるということだった。またメロディも美しいので、親しんで歌ってくれるだろうというネイティブの先生方からの薦めもあってこの曲に決めた。

早速、楽譜の日本語の歌詞の下にローマ字を付けた。またネイティブスタッフに協力を得て、現地言葉に直して意味も理解してもらえるようにした。当日の指導は、日常会話程度しか出来ない私にとって説明する言葉等苦しんだ部分もあったが、ネイティブスタッフに助けられ、とても楽しいものだった。私の範唱に合わせ、慣れない日本語でもメロディを必死に覚えてくれた。私にとってこれまでの授業では感じたことのない新鮮さがそこにはあった。



アン・ニサー校

フェスティバル当日。アン・ニサー校の生徒たちはとても真剣だった。私もその真剣な眼差しに釘付けになっていた。私は訪問後、練習用にCDを届けておいた。きっとその後も日本語の歌詞を一生懸命に覚え、何回も繰り返し練習した姿があったことだろう。そして、私たちの母国語である日本語で、精一杯歌ってくれていることに「ありがとう」の気持ちで一杯だった。曲が終わり、会場から拍手喝采を浴びながら席に戻る生徒を待ち受けていたのは、アン・ニサー校の理事長夫妻だった。一人一人と握手をし健闘を讃える理事長の目には涙があった。その時生徒席は、歌いきった喜びと充実感に満ちあふれていた。その後私も自然と理事長に握手を求め、肩を抱き合って喜んだことは言うまでもない。



アン・ニサー校の生徒達

私も、赴任中インドネシアの歌をたくさん覚えた。そして、何回かインドネシア人の前で歌を歌う機会にも恵まれた。その際、私たちが歌う歌に好感を示してくれることが度々あった。その国の歌をその国の言葉で歌うことは、それだけで、「あなたの国がこんなに好きなんですよ。」という意志表示になる。改めて歌は、世界の人をつなぐ大きな力を持っていることを実感した。

水戸市立渡里小学校 今瀬智洋

帰国して早いもので六か月が過ぎようとしています。学級でアルゼンチンについて話をすると、子どもを通して家庭に伝わっています。地球の反対側アルゼンチンに興味をもってくれています。ワールドカップでもクラスの児童はアルゼンチンを応援してくれました。嬉しいことです。また、今回はPTAの広報誌でアルゼンチン特集を組んでくれました。次の文章はその際、依頼され寄稿した物です。

どこまでも続く青い空、そして白い雲。1時間も郊外へ車を走らせると、全く山はなく地平線と空が広がっています。私たち家族は、アルゼンチンの首都美しい街ブエノスアイレスで3年間生活する機会に恵まれました。時差十二時間、季節も逆の地球の反対側での生活は、生活慣習の違いに驚くこともありましたが、楽しい、思い出深いものとなりました。

ブエノスアイレスは、道路が碁盤の目に区画されています。道路は一方通行で、一本ごとに右向き、左向きと向きが変わります。道と道との距離はちょうど百メートルで、つまり百メートル四方に囲まれた土地はまさに一ヘクタールです。また、すべての道路に名前が付けられていました。

アルゼンチンの人々はこども好きです。家族で散歩していると必ずと言っていいほど声を掛けられました。「お嬢さんは何歳ですか?」「名前は何ですか?」。日本で外国人を見

かけたら、普通日本語で話しかけないでしょう。アルゼンチンではお構いなしにむこうの公用語であるスペイン語で話しかけてきました。また、私が通勤で歩いているとよく時間や道を尋ねられました。白人が九十七パーセントで、私のような東洋人は本当に少なく、どう見ても外国人なのに。時には店の入り口の鍵を開けてくれと頼まれたこともありました。鍵が高い位置にあり届かなくて困っていたようですが、見ず知らずの人に鍵を渡すとは本当におおらかな人々でした。

娘と地下鉄やバスを利用すると、必ず席を譲られました。それも乗るとすぐにです。そのたびに日本と比べて精神的に成熟しているのはどちらだろうと考えさせられました。

三年の赴任期間中、日本に一度も帰国することがなかったので、三年ぶりの日本は驚きの連続でした。特に感じたのは、日本の緑の美しさです。山々の緑には感動しました。日本を離れて初めて感じたこの緑の美しさをこれから大切に守っていきたいと痛感しました。



ルーマニア教育展望

(2003～2005年度 ルーマニア・ブカレスト日本人学校派遣)

学校名：つくば市立谷田部小学校

氏名：大高 純子

1989年、ルーマニア革命勃発。民衆が当時の大統領チャウシェスクを夫人と共に処刑し、共産主義から自由主義へと転じたニュースは記憶に新しい。銃撃戦の後が未だ多くの建物に残っている首都ブカレスト。現在は2007年EU加盟を目指して、法の整備や街のリニューアルが盛んとなっている。

西側との距離が縮み、物価急上昇、生活様式が激変する中、革命前と労働条件が変わらないのが学校教員。2005年秋には地位向上を目指して、数週間に及ぶ教員ストが決行された。本年もまた、9月15日から決行されているとか。賃金の安さ、校内暴力の増加などルーマニア教育界もなかなか大変なのである。

その教育界に身を置く公立93番学校のR教諭。出会った当時、午前中は小学1年生クラスの担任、そして午後は小学5年生クラスの担任をしていた。校舎が足りないため、二部制が導入されているのである。とてつもなく忙しい中で、彼女は子どもたちにとって何が最良なのかを常に考え、挑戦し続けていた。集団になじめない子どもの心をいかにして開き、社会へ導くか。彼女の周りには、いつもたくさん子どもたちがいた。国は違っても子どもを魅了する教師というのにかわりはないのだ、ということ改めて感じた。

特別1番学校M教諭。誰もがしっかりとした教育が受けられる社会を作るため、私的にもがんばる情熱的な教師。チャウシェスク時代、「ルーマニアには自閉症の子どもはいない」と政府は公言していた。しかしその影で、どれだけたくさん子どもたちが闇に葬られたことか。時代が変わった今、ルーマニアの特別支援に関する教育は、欧州の中で大きく遅れていることがわかった。隣国ハンガリーと協力し合いながら、自閉症をとりまく環

境を中心に改善していこうと彼はがんばっている。「子どもたち一人一人が生き生きと学べる環境になるよう、私は努力しなければならない」と話す澄んだ目が忘れられない。

現地スタッフAのママは、私よりずっと年上。でも今、大学生。革命前に学齢期を終えいくら学びたくても学べなかった時代をくぐってきた。学歴や保持している資格により支払われる賃金が変わる今のルーマニア。「よりよい生活のために」と彼女は大学受験を決意。今、自分の娘より若い同輩と勉学にいそしんでいる。もちろん、仕事や家事をこなしながら。家族もそれを応援している。

教育をとりまく厳しい現実を直視しながら彼ら彼女らはたくましく生きている。「学ぶことは人間を成長させる原点だ」と言わんばかりに、誰もが教育を受けることに憧れ、そのチャンスをもにしようと思死になっている。学齢期を過ぎていても、学びたいことがあるれば果敢にチャレンジする。子がより良い教育を受けられるのなら、親は着るもの、食べるものを削ってでも子にかける。そう、東欧唯一のラテンの血が、そうした情熱的な行動に駆り立てるのかもしれない。学ぶ側も、また教える側もあらん限りの力を尽くしているのだ。

今の日本に、そうした勢いがあるだろうか？私の中にそうした教育に対する情熱や、自分らしく生きるための情熱があるだろうか。何事もひたむきに挑戦し続ける情熱＝ラテンの血を3年間、いろいろな人から分けてもらった気がする。教員として、一人の人間として「これでいいや」と思ってしまったとき、再び彼ら彼女らに会いたい。そしてラテンの血を呼び起こしてもらおう。

ホーチミン日本人学校の勤務を終えて

前ホーチミン日本人学校
つくば市立吾妻中学校 八木知則

思い起こせば3年前の成田空港。家族・親戚に見送られて出発ゲートをくぐる。しかし搭乗予定のベトナム航空は空港に影も形もなく、待てど暮らせどアナウンスは無し。食事をしたり待合いロビーで過ごすこと約6時間、やっとの事で別の航空会社に乗れることとなり、ホーチミンに到着したのが夜10時。疲れた体と頭に飛び込んできたのが、多くのバイクとクラクション、南国特有の肌にまとわりつくような熱気。私とベトナムの出会いの日であり、今から思うと懐かしくもあり、強烈な印象でもあった。

その日から長いようで短かった3年間。葛藤の1年目。充実の2年目。初の小1担任となった3年目。たくさんの経験を通して、少し人間的に成長できたように感じる（自己評価として）。帰国して時々テレビからベトナムの情報が流れてくると、ついつい反応してしまう今日この頃、新たな職場で再び頑張ろうと思うのであった。



バトルクリーク補習授業校についてQ & A

根本 紀男（つくば市立二の宮小学校）

Q：どこにあるの？

A：アメリカ合衆国，ミシガン州にあります。人口が5万人ほどの小さな町ですので，残念ながら小学校や中学校で使われている地図帳に町の名前はのっていません。シカゴとデトロイトのほぼ中間に位置しており，どちらの都市へも車を使って2時間ほどで行けます。

Q：小さな町なのにどうして補習授業校があるの？

A：市内の工業団地へ自動車部品関係の日系企業が十数社進出しており，そのためバトルクリーク市内に500人程の日本人が住んでいます。人口に対する日本人の割合はアメリカ人かもしれません。また，近隣の町からも多くの子どもたちが通学してきます。本校に在籍している子どもの数は下の表のようになっています。

表1 バトルクリーク補習授業校学部別児童生徒数（平成18年4月8日現在）

学部	幼児部	小学部	中学部	高等部	合計
在籍数	14人	94人	32人	20人	160人

Q：補習授業校ってどんな学校？

A：補習授業校は世界中に181校あり，日本人学校よりも多いおよそ18,000人の子どもたちが通っています。すべてが私立の学校で，運営は日本人会などが行っています。バトルクリーク補習授業校もその中の一つの学校です。

普段は現地校に通いアメリカの教育を受けている日本人の子どもたちが，週1回土曜日に国語と算数・数学（一部の学年では社会も実施）を，日本人の先生から学んでいます。特に本校では，現地校が夏休みになる6・7月に金曜日も授業を行い，年間49日の授業日を確保しています。また，日本の学校と同じように，入学式，学習発表会，授業参観，運動会，卒業式などの各種行事も実施しています。日本から来たばかりの子どもにとっては，英語が理解できないために現地校で溜まったストレスを発散できる場であり，また滞米年数が長い子どもやアメリカ生まれの子ども（日本語が第一言語となっていない）にとっては日本の文化や習慣を学ぶ格好の場となっています。

Q：派遣教員（校長）の仕事は？

A：補習授業校での任務については，文部科学省ではっきりと次のように規定していません。

- ア 教育課程の編成及び進行管理に関すること。
- イ 学校行事の実施計画の策定及び実施に関すること。
- ウ 児童・生徒の転出入に伴う学籍の管理に関すること。
- エ 進路指導及び教育相談に関すること。
- オ 現地採用教員に対する指導・助言及び研修の実施に関すること。
- カ 教材教具の整備計画の策定等に関すること。
- キ 教材教具の開発に関すること。

授業は土曜日1日しかありませんが，その1日のために地元教育委員会の中にある事務所で様々な仕事をこなしています。日本の学校でいうと教務主任から各教科主任がしている仕事，さらには事務員や用務員の仕事をすべてこなさなければなりません。時には苦情処理（現地校の先生やまた保護者などから），生徒指導の問題処理，また帰国に際しての進学・進路指導までと本当に幅広い仕事です。補習授業校では校長と呼ばれていますが，実際は「何でも屋」といった感じです。

※何かご質問等がありましたら，下記へご連絡下さい。

バトルクリーク補習授業校

(Lakeview School District Battle Creek Japanese School)

住所：15 Arbor Street, Battle Creek, MI 49015 U.S.A.

電話番号：+1(269)565-2416 ファックス：+1(269)565-2428

電子メール：bcjschl@mail.tds.netホームページ：<http://www.bcjschool.org/>

在外教育施設に派遣されている先生方からのご便り

「ハンガリー万歳！」

ブダペスト日本人学校 篠崎篤史

ブダペスト日本人学校に赴任して4ヶ月が経ちますが、今回はこの国の中央を流れるドナウ川のようにゆっくりと時が流れるこの地で私が体験したエピソードを紹介したいと思います。

ハンガリー人は自分たちのことを「マジャール (Magyar)」といいます。親日家が多く、いつでもマジャール語 (ハンガリー語) で話しかけてきます。先日、家族でバスを待っていたときに、ある老夫婦が私たちに話しかけてきました。この国に来て、初めてマジャール語にふれた私たちはまだ大した会話はできません。それでも、その老夫婦は私たちが日本人だということを知っただけで、自分の知っている日本人 (ピアニスト) を紹介しようとしていました。語りはさらに加熱して、なぜか電話番号まで教えてくれました。とても話し好きの人が多いです。また、バスに乗るときに、よくベビーカーを持ってくれ、大変助かっています。マジャールは小さい子どもに対して大変親切にしてくれます。こんなこともありました。家族で横断歩道を渡ろうとしたとき、親切なマジャールは車を減速して止まってくれました。その行為に感謝して道を渡っていたその時、その車の後ろを走っていた別の車が追突！！その後、ドライバー同士で口論を始めてしまったのです。しかも道路の真ん中で！マジャールはある意味熱い (熱血な) 人が多いです。たまたまその道路が片側2車線であったのでほかの車は避けて通ることができましたが、ちょっと複雑な気持ちになってしまいました。何もできなかった自分に対して…。その後、いつかちがった形でマジャールに恩返しをしたいと思うようになりました。そして今日、年老いた女性のマジャールが自分に対して、「ABC (スーパーの名前) ×○▲※…？」と話しかけてきたのです。正直言って ABC という言葉しか聞き取れなかったのですが、近くにその店があることを知っていたので、店の場所を聞いてきたのであろうと思います。案内してあげました。すると、その女性は大変喜んで「köszönöm (ありがとう)」と何度も言っていました。何と気持ちのいいことか！！ハンガリーに来て人間味あふれるマジャールと生活を共にする中で、言葉の壁を越えた「思いやり」というものに気づかせてくれたような感じがしました。

こんなすてきなマジャール国で生活できることを誇りに思い、またそれを活力にして日々の教育活動にさらに励んでいきたいと思えます。「ハンガリー万歳！」



ドナウ川と鎖橋
(奥に見えるのが聖イシュトバーン大聖堂)

上海音楽事情

上海日本人学校 山崎 利幸

爆発的に児童生徒数が増えるこの地「上海」に昨年度派遣されまして、はや1年4ヶ月たちました。昨年は調理準備室の改造教室での学級経営でしたが、今年度は新キャンパス「浦東校」の立ち上げから勤務させていただいております。1度の派遣で2校の勤務というのはまずありえないことでしょうから、貴重な経験をさせていただいております。

さて、音楽教師としてこの上海の音楽事情はとても興味があり、なんと今年度から現地理解の一環として、2つのオーケストラにお邪魔させていただいております。今回のレポートは、その様子を中心にお伝えしたいと思います。

○ ジュニアオーケストラ

小学生から中学校高等部（日本の高等学校）の子供たちが不定期に集まって音楽を楽しんでいます。母体はインターナショナルスクール。しかし虹橋と浦東の上海日本人学校児童もヴァイオリンで数名参加しています。言語はすべて英語。指揮者の先生がすべて音楽をアレンジし、子供たちでも演奏可能な楽譜を用意しています。今年の3月に第1回演奏会が行われ、6月に「ダンスの夕べ」と題した演奏会（舞踏会の伴奏）がホテルで行われ、私も賛助出演いたしました。入場料はすべて中国国内の学習困難地域への募金となります。

○ アマチュアオーケストラ

大学生から一般社会人のオーケストラ。上海では大学入試の際、専門的に音楽のレッスンを受けている人は20点ほど上乘せられるので、趣味で音楽といっても皆さん基礎がしっかりとしています。使用言語は中国語、ただし英語の場合もあります。上海語はみなさん使わないように気をつけています。このオーケストラは2010年上海万博での演奏が決まっています。そして来年度はヨーロッパ公演を予定しています。日本人は私を含めて10人ほど西洋系を含めると外国人の割合は約30%です。毎週水曜が練習日となっていますが、私にとってこの日は中国語の実践学習日となっております。

この上海には日本と同様に西洋楽器を楽しむ文化がありますが、アンサンブルの組み立て方は日本と大きく異なり、特に大人のオーケストラは、バランスという概念が薄いようです。個の技能の高い中国、バランスをとる能力が高い日本、音楽的なインター、この三者がそれぞれのよさを出し合って、新しい文化を築き上げていく上海の音楽事情は、今最も注目されるところでしょう。

ミラノ日本人学校 田地

イタリアでの不登校率は0.80%といわれている。それに対し、平成16年度、日本国内での小・中高等学校の児童生徒の不登校率は1.25%である。ここ数年減少傾向にあるとはいっても、やはりイタリアに比べまだ多い。日本とイタリアの学校教育に、どんな違いがあるのだろうかと考えた。モンテッソーリ校を訪問し、学校の様子を見学した。

幼稚部の子たちは、午前には自分の好きなことを行う。準備から後片づけまで自分自身で行い、教師は見守っている。間違いは正さずに、自分で気づくように支援する。小学部では、1年から5年まで同じ教師が受け持ち、教師はひとりひとりのカルテを持って段階的な支援を行っていた。音楽、美術、体育、宗教の授業は担任ではなく、専門家が行っている。



学習に使われている教具も好奇心をそそるものがほとんどであった。静かな雰囲気の中で個人個人が学習を進めていく。日本ではどちらかといえば受動的な学習となりがちだが、ここでは自ら学習を選択し、課題を見付け、能動的に学習を進めていく。

先に述べたように、ひとりひとり違ったことをやっているが、子ども同士のコミュニケーションが取れていて、一つの共同作業になっていることがうかがえた。やはり環境を整えることが大切であると感じた。

イタリア人は陽気で、人付き合いが上手なのはラテン系の性格だとばかり思っていたが、その他の調査からも、家庭教育、学校教育、社会教育があるからだと分かった。子どもたちは先生や他の人の話をよく聞き、自分の考えをまとめ、それを他の人に分かるように話すという口述力が優れていて、その力には驚かされる。そこで、初めて個人の自由な意見が最大限に保障されている教育であることがわかってきた。イタリアの不登校の発生率が0.8%と推定されていることが実感できた。



架け渡そう虹の橋

平成 18 年度派遣 上海日本人学校 川田美奈子

上海日本人学校は、ここ数年中国への日系企業の進出に伴い児童数が倍増し、昨年度に在籍児童生徒数が2000名を超え世界最大規模の日本人学校となりました。今年度は浦東校も完成し、これまであった虹橋校と合わせると約2200名の児童生徒が学校生活を送っています。

そんな中、大規模校ゆえの大変さをいくつか知ることができました。日本であれば当たり前のように実施できる1年生を迎える会、全校朝会なども大人数ゆえ場所や移動時間なども考慮するなど企画の段階から相当計画を煮詰めていく必要があります。いざ実施となっても児童を動かしていく裏側の大変さを目の当たりにしました。

しかし、大人数ゆえの素晴らしさを感じることもたくさんあります。6月に行われた運動会は校庭での実施が困難なため、陸上競技場を借りて行ったのですが、各ブロックごとの表現運動などは、人数の多さを生かしたダイナミックな動き、迫力ある演技など素晴らしいものばかりで圧巻の一言でした。

私の派遣された虹橋校は職員数も70名を超える大所帯ですが、全国各地から集まってきた先生方は皆、指導熱心で個性豊かな方々ばかりです。学習指導法、学級経営など様々なアイデアをお持ちで、私自身学ぶことも多くよい刺激を受けています。本年度は総合的な学習の時間と生活科の研修も行っており、在外教育施設ならではの特色を生かした単元構成（現地校との交流、中国語の学習）や年間指導計画の作成が進められています。

日本と上海、たとえ場所は違っても子ども達への思いが変わることはありません。一人ひとりのよさを生かせるよう、力を伸ばしていけるよう私も日々学んでいくことが大切であると感じています。子ども達にとって居心地のよい学校、多くのことを学べる学校であるためにはどうすればよいのかを考えていくことも忘れてはならないと思います。上海日本人学校に派遣され、出会うことのできた方々からたくさんのお話を吸収し、微力ながら日本の学校との架け橋となれたらうれしいです。



異国で学ぶということ

パリ日本人学校教諭 古橋 雅文

まさに右も左もわからない異国の地に来て早2年半。今ではすっかり地図なしでパリ市内を運転できるまでになった。最初の頃は「エッフェル塔だ」「凱旋門だ」と感動したものの、今ではすっかり見慣れてしまい、何も感じなくなってしまった自分の感性にちょっと淋しさを覚える。

さて、在外教育施設での教育に携わるようになり、ふっと思うことがある。それは、「日本とフランスのどちらで教育を受ける方が子どもにとってよいか」ということである。一歩学校を離れると、そこは日本ではなく、フランスであることを思い知らされる。歩いている人、建物、看板、そして言葉。どれ一つとってもそれは日本ではなく、フランスである。自分と肌の色が違う人がこんなにも多くいる。自分のしゃべっている言葉が通じない。日本で食べているものが売っていない。地球上には、日本ではないところがある、ということを感じることが、人生の中で大変なプラスであろうと思う。そこから波及する学習効果は計り知れない。「あの建物は何なのか」「この国の人と分かりあえるためにはどうしたらよいか」「なぜ肌の色が違う人が同じ国に住んでいるのか」「なぜ暴動が起き

るのか」小さな疑問の一つ一つが、歴史学、地理学、言語の習得、ときには化学や物理学、植物学へと広がっていく。自然と学習への意欲を高めることができる。これは素晴らしいことだと思う。

また、ときに普段会うことができない人と会うこともできる。昨年は、ストラスブール在住の宇宙飛行士向井千秋さんのお話を全校児童・生徒で聞くことができ、宇宙に対する関心を高めることができた。

しかし、よいことばかりではない。パリの中でも日本人が居住している地区はかなり限定され、狭い日本人社会を生活の基盤としている。そのため、人と人の関わりが絶対的に少ない。時々、もっと強くなって欲しいと思うことがある。国内以上に、お互いが傷つくことを恐れ、仲良しでいようとする姿は、ときに痛々しく感じることもさへある。長期休業になると家族以外と会話することがないというような児童・生徒も珍しくない。また、運動する機会が少ないため、体力がびっくりするほど足らず、驚かされることもしばしばである。「部活動」という響きにあこがれをもっている生徒は思いのほか多い。しかし、治安の問題やバス通学の生徒が大半を占めることが理由で、部活動もままならない。

全体的には、恵まれた家庭環境の中で、何不自由なく生活し、学習に集中できる環境が整っている反面、社会の出たときに、荒波に飲み込まれてしまうのではないかと一抹の不安も感じる。そんな、児童・生徒のために自分のできることは？ 明確な答えは出ないが、今まで自分が得たものを少しでも児童・生徒に伝え、感じてもらえるように、日々の教育活動に精進したいと思っている。



リマ日本人学校 坪井 悟



私は、平成18年4月に、ペルー国リマ市のリマ日本人学校に派遣されました。リマに来てから半年が過ぎました。リマ日本人学校は開校以来38年目を迎えました。学校は小学部中学部があり児童生徒数は、毎月変動はありますが約50名います。ペルーへは、日本からの直行便がなく、北米で乗り換えが必要です。リマへの到着は、飛行機運航関係上夜中の到着です。

ペルーの治安状況は、観光地はだいたい安全です。しかし、貧困や貧富の差がある国です。リマ市内と言えども、危険な地区がある状況です。赴任して驚いたことの一つに、日

本ではどこの学校でも避難訓練があります。こちらの学校は、テロリストへの警戒のため、非常事態訓練があります。学校へや通学バスへのテロリストに備えての訓練です。学校の警備は24時間体制で警備員が数名常時警備をしています。児童生徒の送り迎えは親同伴

が原則です。帰りの下校バスでの児童生徒の引き渡しも親であることを確認します。ですので、児童生徒の安全を第一に考え行動する必要があります。日本でも、最近の子どもたちを取り巻く状況は、昔と比べ安全だと言い切れませんが、ここリマでは、家族全員が安全に最善の注意をしながら生活することが当たり前のことなのです。学校の生活は、日本人ばかりではありません。現在、両親のどちらかが日本人であれば入学を許可していますので、スペイン語を話す子どももいます。母親が、日本語の話せない家庭では、なにかと苦労する場面があります。学習は、日本での授業と同じ授業が展開されています。特徴のある授業としては、小学部1年生から中学部3年生までが、「スペイン語会話」「英語会話」の授業が組み込まれています。学校を出ると、日常会話はスペイン語が主なことばです。

学校の行事が多く設定され、運動会やマラソン大会、宿泊学習や修学旅行など様々。今年度は5・6年生の修学旅行が行われました。私も引率をいたしました。場所は、ペルー国内のイキトスです。イキトスは、リマ空港から飛行機で1時間半のフライト。アマゾン川があり、アマゾン川をボートで下り1時間半、ロッジでの宿泊です。広大なアマゾン川を目の当たりにし、大自然を肌で感じました。ペルーは南半球ですので、北半球にある日本とは季節が逆さです。6・7月は冬なのです。修学旅行は6月でした。乾期になりますので水量が多くないそうです。しかし、初めて見るアマゾン川は川幅が800メートルから長いところでは1200メートル以上です。児童は、ピラニア釣りやアマゾンのジャングル探検が楽しかったようです。夜にボートでアマゾン川探検をしアマゾンにしかない珍しいものを見ました。空を見上げると、天然のプラネタリウムです。初めて見る南十字星が今でも目に焼き付いています。

ペルーは、歴史的に日本人の移民があり、日系人がたくさんいます。日系の学校もいくつかあります。その日系校との交流学习があり、一緒に授業をする機会があります。授業に参加し学ぶところがたくさんありました。音楽の授業では、民族楽器を使い「folklore」が行われていました。街の中でも、民族楽器を片手に演奏している人、民族衣装をまとい歩いているご婦人の姿が見られます。ペルーは、世界遺産である「マチュピチュ遺跡」があります。ナスカの地上絵もあります。アマゾンもあります。チチカカ湖もあります。コンドルが飛ぶ谷もあります。インカ帝国の歴史を感じる国なのです。

食べ物は、おいしいです。だいたい食材は手に入ります。しかし、外国産は高価です。インカはジャガイモの発祥の地です。なんとインカ時代には、2000種もあったのだそうです。そして、インカ時代に農業試験場までもが存在し、地形や高度、温度の差のある土地だけに、どのような栽培をするか、品種改良までされていたそうです。ペルーで食べるジャガイモはおいしいです。料理のメニューによって、ジャガイモの種類をかえるのです。なんだか贅沢なような。

赴任し半年なのでまだまだわからないことが多いですが、日本とペルーで共通したことを感じます。「人間がお互いに仲良くすることが一番大切である」ことです。人種や肌の色、ことばの違い様々な問題があります。けしてペルーでの日本人社会と言えども例外ではありません。日本でも同じではないでしょうか。人々が仲良く暮らす大切さ、しかし、難しさもあります。人の「こころ」のあり方を考えさせられます。

色々ありますが、今までの経験を生かし、自分の力を精一杯だし、子どもたちのために頑張っています。茨城の教育現場で培ったことを、ここペルーのリマ日本人学校でも役立てます。

では、またの機会に、こちらの状況を報告いたします。

ありがとうございました。

ロシア事情 大学における日本語教育について

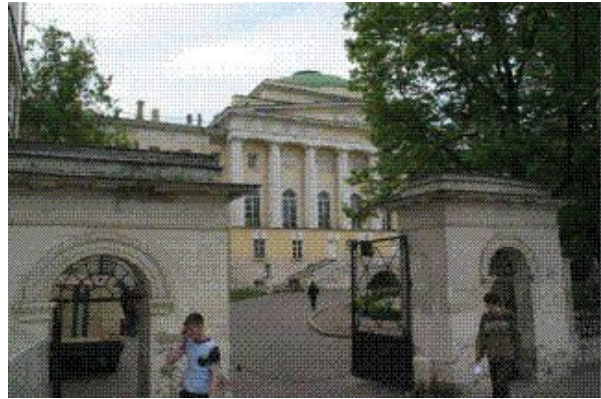
モスクワ日本人学校 小沢 浩

昨年は、ロシア1239番現地校を訪問し、そこにおける英語指導について紹介をさせていただきました。今回は、ロシアの言語教育のなかで、とりわけ大学における日本語教

育にスポットをあてて紹介をしたい。というのも、大学で日本語を専攻しているロシア人学生は多いからである。最近では、高校のカリキュラムに日本語を取れ入れている学校もあり、益々日本語を学ぶ生徒は増えているという。年に一度、日本語による弁論大会があり、そこに参加する生徒は日本語を流暢に使いながら、自分の意見を述べている。

大学で日本語を専攻し、日本語を学び始めて3～4年であるにもかかわらず、読み書きができ、日本語の能力が高いのはなぜなのか。モスクワ大学 ИСАА(イサ)を訪問して調べたこと・感じたことを赴任国事情として記したい。

ИСАА はモスクワ大学の一つの学部である。Институт(大学)の И, Стран(国)の С, Asia and Africa の二つの А の頭文字をとって ИСАА と呼ばれている。アジア・アフリカの言語だけではなく、その国の文化や経済についても学ぶことができ、それぞれの言語は3つの学科、経済学科、歴史学科、言語学学科に分かれている。現在、日本語科の教授数は20人近くおり、生徒数は一つの学部で一学年10人と少人数制をとっている。1授業の授業時間は1時間20分で、途中10分間の休憩が入る。日本の大学と大きな違いは、日本語が週に8コマもあることだ。語学を学ぶ上でそのくらいの授業数は必要だという。



モスクワ大学 ИСАА(イサ)の正門から

日本語科の大きな特色は3つある。一つめは、教授達が独自に作った日本語テキストやテープ等を中心に徹底した詰め込み学習をする。4ヶ月の間に、日本語のテキスト約15課分を学んでいく。1課に盛り込まれている平仮名や漢字の情報は多く、毎時間それを積み重ねていくので、カタカナ、平仮名を始め、多くのボキャブラリーを生徒は身につけることになる。それに加えて漢字も1日に約20個ずつ覚えさせる。学年が上がる毎に日本語の言葉を学ぶ授業数は減っていくが、反対に新聞や日本語で書かれた専門書を使っての講義やゼミが増えていく。それを通して学生は難しい日本語が確実に読めるようになり、また文化についても学んでいくのである。

二つめは、少人数制を導入していることである。語学を学ぶ上で、理想的な人数は4人から6人ぐらいだと教授は述べる。それ以上になると一人一人に与えられる発話量が減り、効果がないという。ИСАА では途中、学部を変える生徒がいるのでそれを見込んで10名以下の人数で構成している。

三つめは、生徒がどのように学習していけばよいのか、どう学ぶべきかを、教授が細かく指導していることである。「人は知らないことがたくさんあり、知らないから困っていると嘆くのではなく、わからなければどこでその知識を身につけていくかを知ることが必要」で、語学は基本的に自分で学ぶものなのだと教えている。したがって、中途半端な気持ちで学ぶなら来ない方がいいとも教授はいう。笑い話ではあるが、大学の定期テストも厳しく、10人が試験を受け4人が試験に落ち追試を受けるとい



モスクワ大学 ИСАА(イサ)の正面

教授は生徒の学ぶべき到達点を見据えて目標設定を行い、その目標の達成のために容赦なく生徒を鍛え上げる。ところで、ИСААにはエリートが集まってくると言われる。その理由は、もともと日本語は難しいものだと思われていて、その難しいことにチャレンジする生徒が集まるため、生徒の日本語学習へのモチベーションは高く、まじめでよく勉強をする。先生にとって、ロシアで

は「優しい先生」と言われるのはよくないことで、厳しい先生の方が好まれる。教授達はよく積み重ねて学習をさせ、よく勉強させている。学生もまた、出された課題に一生懸命に取り組む。その双方の真剣さが彼らの語学力を高めているのかもしれない。

昨年度訪問した1239番校の英語科の授業とモスクワ大学 ICAA の授業には大きな共通点がある。それは、生徒自らが自分の力で学習することができるように学習の方法とその必要性をよく教えていることだ。毎日かなりの量の課題が出されても、生徒はそれを怠ることなく、語学力アップのために努力し続ける。教師は、学ぶ姿勢と学び方を教え、語学力の積み重ねができる環境を提供するサポート役となっているのである。その努力が生徒の豊富なボキャブラリー量や文法力、そして発話能力を高めているのである。

昨年度と今年の現地校訪問を通して、どのように生徒にサポートしていけばいいのか、見えてきたような気がする。今後、生徒にどのような課題を与えれば自らの力で学習を進め、自己学習力を高めていくことができるのか、生徒へのアプローチの方法を探り、よりよい授業作りを目指したいと思う。また積み重ねができるような環境を英語の授業の中でどのように作っていくことができるのか、教材の開発と共に指導法についても学んでいきたいと思う。

ブラッセル日本人学校 橋本慎一郎

今年のブラッセルは8月にはいると、急に涼しくなり日本とはまったく逆になった。昼間でも20℃前後とありがたくもあったが、少々物足りない夏を過ごした。子どもたちは、日本へ一時帰国したり、家族でヨーロッパ周遊の旅、あるいは北極ツアーに参加したりなど、日本では考えられないような大きな夏休みを過ごしていたことが、日記や課題の新聞からわかった。大企業がバックについていることで、余暇の取り方もビッグであることに驚いてしまう。

そんな夏休みも日本よりも1週間短く、2学期は8月21日から始まった。そして、2週間後に運動会が開かれた。暑いグラウンドで行進練習をするわけでもなく、さわやかな風が吹くなかの練習は、子どもも教職員もモチベーションが自然と上がってくる。少々寒いくらいのほうが、子どもたちはよく動くようだ。日本で練習していた運動会の練習を思い出す。行進の時の足をそろえる。行進の練習に多くの時間を費やす。前へ習えを何回もやり直す。35℃を越すグラウンドでの表現運動や鼓笛パレードの練習で、子どもたちは疲れだれる。うまくいかなければ当然、やり直しになる。汗だくになりながらひとつの種目をやり遂げた時の子どもたちの歓声と私たちの喜びと励ましの声。これは、暑いさなかの練習だからこそ味わえるものであるような気がする。

ここブラッセル日本人学校の運動会の練習では、声を張り上げて練習の指導をする場面はなかった。キビキビした雰囲気さえないものの、それ相当に整列をする。応援の声を出す。小学生と中学生が力を合わせて応援練習をすすめる。日本での練習とはまったく違う雰囲気に昨年は戸惑ったが、今年のこの風景は普通になってしまった。環境がこのような違いを生み出すのだろうか。それとも子どもたちが違うのか。運動会が終わった今、考えながら文を作っている。

ここで検証はできないが、もし、日本でも涼しいなかで練習をすればスムーズにいくのであろう。声を荒げなくても、体を動かしてくれるのであろう。入場行進の練習もやり方を見直せば、長い時間子どもも教師も苦しむことはないであろう。今出た結論は、どこに行っても子どもたちは同じであり、環境こそが子どもたちを変えているのである。

でも、あの暑さの中の緊張感と達成感が懐かしい。しかし、今年の運動会当日の閉会式で中学生の応援団長が泣いていた。小学生も泣いていた。汗は乾いていても、達成感は何所に関係なく、子どもたちの身体と心で味わっていたのである。放送担当の私は、スピーカから聞こえてくるすすり泣きが、なんとも心地よく心に響いていた。やっぱり、運動会はどこでも同じだ。

3年目をむかえて

クアラルンプール日本人学校 板谷 康

早くも派遣3年目に入り、年を追う毎に時間の流れが早く感じるようになりました。初めは、何をすることも戸惑いがありましたが、3年目になると何をすることも当たり前のようにできるようになり、生活面においても不便を感じることもなくできるようになりました。

1 特色ある授業

本校の特色としては、全学年での英会話授業、現地指導者によるイマージョンスイミング、小学部高学年での専科授業、中学部でのサークル活動等が挙げられます。特に、英会話においては、児童一人ひとりのレベルに合わせて少人数クラスを編成し、外国人教師により専門的に実施しています。小学生でも英検2級を取得する力も身につけています。また、イマージョンスイミングでは、外国人の専門のコーチ2名と日本人教員1名の計3名で行い、専門のコーチが英語を使っての指導、日本人教員が補助で指導に加わっています。本校には、小学部に25mプール、中学部に50mプールがあり、高学年の授業や国際水泳大会に向けての練習では、50mプールで練習を行っています。水深も1.6mあるので、怖さを感じる児童もいますが、練習を重ねるうちに泳力を身に付け、クロール、平泳ぎ、バタフライ等の泳法をきちんと身に付けています。年間を通じて水泳指導ができる環境ならではの活動であると感じます。

2 国際交流会

本校では、日本ではできない活動も盛んです。年2回、各学年ごとに国際交流会を実施しています。1回目は1学期に行われ、現地校の児童を招待しての日本の文化を紹介する交流で、名刺を作って英語を使っての自己紹介や折り紙、カルタ、縄跳び、竹馬など日本の遊びを教えながら楽しく交流しています。

2回目は2学期に行われ、現地校へ訪問しマレーシアの文化に触れる活動を行います。今回は、現地の子ども達からマレーシアの遊びを覚えてもらうのが主な活動で、特に、チョンカという遊びが有名です。



3 生活全般について

クアラルンプールというマレーシアの首都で生活しているので、日本と同じようで、不便を感じることもなく生活していますが、長期の休みには様々なところに訪れることができました。

その1つにコタバルという都市があります。ここは、マレーシアの東海岸のタイに近いところに位置しています。ここはマレーシアの中でも特にイスラム色の強い地域です。また、第二次世界大戦の時に日本が最初に上陸したところでもあります。ここには、その後、マレーシアの独立を記念してつくられた独立広場があり、その横には第二次世界大戦当時の様子がわかる資料を展示した戦争博物館があります。当時、イギリスの統治下にあったマレーシアは、日本によって解放されるということで歓迎した人々もいたようですが、その反面たくさんの人々が犠牲になり、反日感情をもつ人々もいるようです。



日本軍上陸地
Pantai Sabak
パンタイ サバ 海岸



独立記念碑

2つめにマレーシアの東にあるボルネオ島にも行きました。ここでは、半島マレーシ

アとはちがい、自然の宝庫という感じがしました。いくつかの先住民族（Ivan）が住んでおり、その生活に触れることができました。ロングハウスという大きな1つの木造の高床式の住居のそれぞれの部屋に1家族ずつ壁1枚をはさんで29家族が酋長を中心にして仲良く住んでいることには驚きました。私たちが行くと、とても喜んで歓迎してくれました。クアラルンプールとは違う 昔からの伝統を重んじた生活をしている姿に感動しました。



Ivan の人達



Ivan の住居

4 まとめ

このように、マレーシアに来て3年目を迎えて、日本では知り得ない様々な体験をすることができました。日本文化との違いを感じながらも、その素晴らしさを十分に感じることができました。派遣期間も残りわずかになりましたが、その中で、また新たな発見をしていきたいと思えます。そして、日本での教育活動に生かしていきたいと考えています。

メキシコにおける日本人の人的貢献について

日本メキシコ学院日本コース 木村 健治

「緑の革命」という言葉と、その意味を知っている日本人はどのくらいいるのでしょうか？正直に言いますが、私もこちらに来て初めて知りました。

農業研究での20世紀最大の成果が「緑の革命」と言われています。

1960年代半ばに南アジアでは食料生産が人口増加に追いつかないために大規模な飢餓が心配されました。メキシコにある国際トウモロコシ・コムギ改良センター（CIMMYT）とフィリピンにある国際稲研究所（IRRI）が中心となり、従来品種に比べ収穫量が2～3倍も高いコムギ、イネの品種が作成され、その普及によって飢餓を救うことになりました。



この業績が「緑の革命」と呼ばれ、CIMMYTのコムギ部長であった、ポーローグ博士に1970年のノーベル平和賞が授与されました。その「緑の革命」に大きな貢献をしたのが日本のコムギ、農林10号の持つ草丈が低くなる遺伝子でした。「1つの遺伝子が1億人の生命を救った」と言われています。

そのCIMMYTに対する日本の財政貢献は、1970年代末までにおよそ35億円におよんでいます。そして、現在までに多くの日本人研究者が様々な研究に従事しています。

その研究の一部を紹介します。「赤かび病抵抗性コムギの開発」です。

世界各地で深刻化する赤かび病に対して、各国と協力し新しい抵抗性資源の探索を行っています。ここでは、赤かびに強いコムギの遺伝子の組み換えばかりでなく、環境要因と病原菌との相互作用を調査することで、赤かび病抵抗性のメカニズムを解明しています。

「緑の革命」の最大の効果として、世界レベルでの穀類の生産性が上がり、国際価格が安定していることがあげられます。もし、この革命がなければ、穀類の国際価格は2倍になっていると言われています。このことから考えて、世界最大の食料輸入国の日本の消費者が経済的に「緑の革命」の恩恵を受けていることがわかります。

メキシコの地で、日本人が世界のために貢献していることを知り、自分もメキシコに貢

献できることを模索しはじめました。



様々な種類のコムギを栽培している畑



世界中のトウモロコシとコムギの種子を保存している遺伝資源センター

カラチの子どもたち

在カラチ日本国総領事館附属日本人学校 鳥羽 誉司



本校の児童生徒数は15名前後を推移している。派遣教員が6名なので、1人の教師が約2人の子どもを教える計算になる。ここだけを考えて授業はまるで家庭教師に教わっているようであり、まさに個に応じた指導である。私は算数・数学・理科を教えているが、とても能率良く学習を進めることができる。しかし、この子どもたちは友達と競争したり相談したりする場面がなく、意見をたたかわせたり友達の意見に納得したりという場面がほとんどない。日本では少人数教育が求められているが、あまり少なすぎるのも問題で

ある。また、昨年は中学2年生が1人で他はすべて小学生。遊び相手も小学生である。同学年の友達とおしゃべりをしたり買い物をしたりというのが日本では当たり前だが、ここでは無理な注文である。また、この狭い集団で人間関係が崩れると生きていけない。子どもたちは絶えず気を遣って生活している。授業も気を抜く暇がない。これはストレスとなりかわいそうなことだと思う。

先日は学校の前の道路で発砲事件が発生した。バイクを盗んだ犯人を取り押さえようとしたガードマンが、足を拳銃で撃たれるという事件が発生した。さらに追いかけてくる人に対しバイクに乗った犯人は銃を撃ちながら逃げていった。学校には8名の銃を持ったガードマンが24時間体制で警備しているが、いつ不審者が侵入するかも分からないという状況で、子どもたちは学校の敷地内で生活している。最近新聞に「バイクと携帯電話が何台盗まれた（合わせると1日平均60件）」という記事が毎日載っている。今年起こった爆弾事件（死者約50人）以降治安は悪くなっているように感じる。本校の事務職員も銀行帰りに銃を突きつけられ、財布と携帯を取られた。身の安全を第一に考えると、子どもたちに限らず大人も自由に外へ出られない状況なので、保護者は子どもたちに少しでも楽しんでもらおうと「七夕夏祭り」という行事を学校と共同で1学期の終わりに行っている。夕方から夜にかけて、音楽を中心とした子どもたちの発表会と育友会（PTA）が主催

する夜店で日本のお祭りの雰囲気味わってもらおう行事である。発表会には日本人会員の方々を招待している。発表を見に来てくれた方からは、子どもたちの真剣で一生懸命な姿に感動され、「心が洗われる思いがした。」という感想をいただいた。

保護者の都合でこんな不自由な生活をさせて子どもに申し訳ない。と思っている保護者もいる。しかし、ここでの経験は決して無駄になることはなく、むしろ人間の幅を広げてくれるものと信じている。子どもたちからは現状が辛いという声は聞こえてこない。むしろ、少ない人数だからこそ一人ひとりの結びつきが強く全員が家族のような感じである。悪いことをすれば気づいた大人が注意をする。昔の日本ではまわりの大人が近所の子どもをしかることはよくあったと聞く。カラチは、職員に保護者も含めた全員で全員の子どもを指導している。これが理想だと思う。

昨年カラチ日本人学校は40周年を迎え、記念式典を実施した。今までカラチ日本人学校に関わってこられた方々の思いを胸に、今は減ってしまった子どもの数もきっと増える日が来て、50周年、60周年と続くことを願っている。

「国際理解」ということ

フランクフルト日本人国際学校 山脇信至

ドイツでの生活も3年目になり、いつの間にか自分が質問するより、他の派遣教員から質問されることの方が多くなりました。基本的に3年ごとで教員が変わる中、学校の伝統を守り続けていくことは容易ではありません。自分が引き継いだものを後に渡していくサイクルがあまりにも早く、つい現地採用でこの地に長く生活されていらっしゃる方々に頼ってしまいます。そういったことがあるたび、たかだか3年ぼっちで知ってるような顔をしてはいけない、と自分を戒めています。

さて、今回は国際理解について少し。日本にいるときは、海外に出れば国際理解や国際的な感覚など、自然に身に付くものだと思っていました。しかし、それは甘い考えでした。昨年度お伝えした通り、ともすると日本の学校より日本らしいフランクフルト日本人国際学校です。主体的にドイツについて学ぼうとしなければ、情報は入ってきません。児童も教職員も、学校と家の往復だけならば、すべて日本語のみで事足りてしまうのです。それゆえ、どの学年も積極的に現地校との交流や校外学習などに取り組んでいます。その一例として、昨年度担任をした2年生とともに行った、国際交流活動を紹介します。

《生活科「みんなであつころうフェスティバル」改め「Toy祭」について》 小学部2年

始めに 市内小学校2年生が集い、手作りおもちゃの出店をして、お店屋さんやお客さんになって合同フェスティバルを行い、各学校で考えてきたゲームをしたり、作ってきた作品を鑑賞したり交換したりして、多くの仲間と学習の成果を認め合いながら、いろいろな文化をもつ子ども達との交流を楽しむ。(下線→日本人学校、ドイツ現地校、フランス人校、ユダヤ人校の4校131名で実施)

子ども達は、言葉を十分に交わせなくとも、お店側は自分達が準備したものを、身振り手振りで説明しようとし、お客さん側は同年代の子どもの様子と準備したのを見ながら、お店側の子どもの考えを理解しようとし、手作りのおもちゃを通していろいろな文化をもつ子ども達と交流することができると思う。言葉が少なくとも交流ができて充実感を得られるのは、低学年の特権であり、ここフランクフルトは、外国人が多く住む国際都市である。子ども達が町に出れば、ドイツ人はもとより、様々な人種が生活していることに気づく。しかし、なかなか交流をする機会がない。生活科の特性を生かして、そういった現在の地域の様子を実感できるような行事にしたい。

児童の様子 TOYまつりまでの活動を振り返ると、まず計画を練る際、子どもから「まだ見たことのない人呼んで友達になりたい。」「自分たちの力でフェスティバルを成功させたい。」といった担任がもっていたねらいや計画通りの意見を聞くことが多かった。ただし、子ども全員がそういった思いをもち続けて活動するのは容易ではない。

そこで、できる限り一人一人が意欲を持ち続けて活動ができるように、お店づくりはこちらで種類を限定せず、子どものねがいを尊重した。その結果、子どもは遊びに自分の工夫を十分取り入れ、当日を心待ちにすることができた。

その当日の子どもの感想を読むと、お店の時間には、どうしたら外国人のお客さんが来てくれるか、フランクフルターメッセのピーターディレクターから教わったA-I-D-Aを忘れずに、習ったドイツ語を駆使して、身振り手振りで一生懸命応対している様子が分かった。お客さんとなった時間には、外国語と身振り手振りをヒントに、違う文化の遊び方を理解して、遊びを楽しんだり、日本の遊びと比較したりしていた。その過程でドイツ語の活用に自信をもったり、ドイツ語の学習の必要性を感じたり、未知の外国語にふれて興味をもったりと、語学に関する気づきもあった。

終わりに 私自身、ゲームの司会進行をドイツ語で行ってみた。私のつたないドイツ語でも全体がルールを理解し、動いてくれた。これは嬉しかった。もっとドイツ語を勉強しようと思った。日本において語学を習得するために一番足りないのが、学んだことを実際に使えるチャンスであると痛感した。国際理解についても、単なる知識としてではなく、子どもたちが積極的に実践につなげていけるような環境を作ってあげる必要があると感じた。

もし興味がございましたら、メール等でご質問ください。まとまりのない文で恥ずかしい限りですが、ご了承ください。Toy祭の記念写真を添付致します。

2006年9月6日 フランクフルト日本人国際学校 山脇信至



茨城県の壮行会のお知らせ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会の壮行会が下記の通り開催されますので、皆様お誘い合わせの上、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

記

- 1 日時 平成19年3月3日(土)
14:30～ 受付開始
15:00 開会
- 2 場所 みまつホテル
- 3 問い合わせ先 牛久市立下根中学校 教頭 豊島 豊(本会事務局長)
連絡先 029-873-6153

広報・研修担当者よりのお知らせ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会では、年1回広報紙「SECO」を発行しておりますが、この広報誌は雑感的なものをまとめたものです。帰国した会員や在外教育施設に派遣されている会員の現状を知ってもらい、情報交換をするためには、意味のあるものです。しかし、これだけにとどまらず、海外での現地理解教育・国際理解教育や日本での国際理解教育について、広く原稿を募集し、会員やその他の皆様の教育に資するものを作成したいと考えております。そこで、下記の通り現地理解教育・国際理解教育に関する原稿を募集いたしますので、応募をお願いいたします。

記

1 内 容（研究テーマ）

- ①在外教育施設や国内の学校で行った現地理解教育・国際理解教育に関する研究
- ②派遣国理解に資する資料（自分でまとめたものに限る）
- ③外国人児童生徒の日本への適応に資する研究（生活指導や日本語指導も含む）

2 応募資格

- ・本会会員及び会長が認めたもの

3 応募規定

(1) 応募条件

- ①未発表の論文や研究に限る
- ②1人一篇とする。共同執筆も可。

(2) 形式・タイトル等

- ①論文作成に当たっては、パソコンで「一太郎」もしくは「ワード」を使用のこと（手書き原稿は不可）。
- ②A4用紙使用、縦置き・横書き（40字×50行）とする。
- ③論文の構成は、表紙・要旨・本文とする（但し、それぞれ別葉にすること）。
- ④表紙には、次の事項を記載のこと。

ア. 研究テーマ

イ. 氏名

ウ. 派遣国

エ. 派遣年度（※ 会員以外のは、ウ、エは記入の必要はありません。）

オ. 学校名

カ. 学校住所

キ. 学校電話番号

※ 共同執筆の場合は、代表者の後に「代表」と記入し、共同執筆者全員の氏名を記載すること。

- ⑤要旨は、2,000字以内とする。

⑥本文

ア. 制限枚数 上記②の様式で10枚以内（図表、注釈、参考文献等含む）。

※ 表紙、要旨は、本文には含めない。

イ. 参考・引用文献については、出典を明記のこと。

4 締切

- ・平成19年5月31日（木）

5 提出先

- ・できるだけEメールの添付ファイルにて送信してください。

※ アドレス (kouhou1 (いち) ibakai@yahoo.co.jp)

- ・Eメールで送信することができない場合には、下記住所までFD、CD-R等の記憶媒体に入力して送付してください。

※ 送付先

〒311-2423

茨城県潮来市日の出2-25-16 河嶋 賢一

TEL 0299-66-0870

6 その他

- ・応募者多数の場合は、茨海研のホームページのみの記載となることもあることをご了解下さい。

あ と が き

ここに、2006年度の広報誌をお届けいたします。

今回の広報誌には、会長の小出先生を始め、帰国された先生方や海外の先生方からたくさん原稿をいただきました。お忙しい中、原稿をいただきまして、どうもありがとうございました。この場を借りましてお礼を申し上げます。

日々の雑務に追われ、海外での生活が遠い記憶の彼方に去りつつある私にとって、この広報誌と毎月送られてくる「JICA MONTHLY」が私と海外を結ぶ接点です。この広報誌が、帰国された先生方には海外との接点に、そして在外教育施設に派遣されている先生方には、日本との接点になってくれればいいと感じながら編集しました。

日本では、教育基本法が今国会を通ることが現実となりましたが、中央教育審議会の答申の中で、「『21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成』を目指すため、これからの教育は、以下の5つの目標の実現に取り組むことが必要。」であるとして、その5番目で「日本の伝統・文化を基盤として国際社会を生きる教養ある日本人の育成」を掲げています。そのリーダーとなるのは、在外教育施設での経験のある我々ではないでしょうか。そういった意味でも我々の責任は重いし、この広報誌の役割も増大しつつあると思います。

広報誌は、下記のホームページアドレスでもご覧いただけるようになりました。興味のある方は、ご覧下さい。ホームページアドレス - <http://www.zenkaiken.net/~ibaragi/> または、全海研のホームページ「地方組織-茨城県」からも見られるようになっています。

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌」をよりよいものにしていきたいと思っておりますので、広報誌、ホームページに関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメールでのご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス (kouhou1 (いち) ibakai@yahoo.co.jp) (文責 河嶋)